

うらやましがられた話

突然一ヶ月半程度休みをとった。長い休みだった。右橈骨遠位端骨折。

ただ片手の手首を折っただけで、二、三ヶ月かかるだろうというのは大変なことである。

休みを終え仕事にかえて、T先生に患者さんの事で連絡させて頂いたところ、やさしくいたわって下さったあと、

「休みをとれるというのはうらやましい。ついにはその体験を文章にしたらどうか」との事。T先生の文章はトテモ説得力があり、これがその結果である。

六月十二日夜、四国で交通事故にまきこまれた時、私は車の助手席から降り、意識のない運転者を車からひっぱり出すのを手伝って、歩道にたどりついてから右手の動かないのに気がついた。

手先の垂れ下がった右手を慌てて左手で支え、無我夢中で救急車に乗り込む。〇。飽和度九十六、血圧が低いといつては測りなおしてくれた。手先をつままれて、私が「きゃあ」と言うと、これは折れているなど救命士さんはなれた手つきで固定して下さいました。

病院について、レントゲンで手根骨の下に、ポコッと黒い闇があり、変だと思った。

整形のDrに、

「こりゃあ骨がひどいな、今までにも骨折したでしょう」と言われて、イイエと答える。
二、三年前、肋骨を折ったことは全く思い出さなかった。
だんだんお迎えが近くなってゆく。

「麻酔をするとまずいから、麻酔なしで整復します。かなり痛いですよ。」とベットに寝かされる。
力を抜くように指示されたあと、前腕をしばらくのように、三、四度引き伸ばされ、私は「わーっ」と叫ぶ。
「痛いですか、もう一回、いやいやこんどはもうそうは痛くありません」
看護師さんは、気の毒そうな、少しおかしそうな顔をしている。

「今、ゴキツといったでしょう。これでもどつています」

先生すみません、自分の叫び声で、大事な音は聞き逃してしまいました。
レントゲンを撮り直したら、見事に骨は整復されていた。

Drはニコツと笑って、さあギプスを巻きましょう、と言う。

「えっ、今ギプスするんですか、いやだ、腫れてくるですもん」と、ごねる。

迷医はめんどろな患者になるのである。

「よろしいですか、もうこの手は腫れています。このまま固定しないと駄目です。後で困ったら夜中にいらっしやい。ギプスを切つてあげますよ」

「えーっ、夜中にギプス切つてもらえるんですか」

「今(PM8:00)も、夜中も変わりなんかあるもんですか」

私はDrの顔をじつと見た。限りなく、神に近いと思われた。

私はギプスは冷たいものだと思っていたが、いつの間にかホカホカ暖かいものに変わっていた。
肘まですっぽり入るとけっこう重い。

「このままで、転ぶと骨折します。気をつけて下さいよ。寝る時は腕をこうお腹の上に」

先生、お腹はボテボテしていますが、この重みはちよつと無理でした。結局バンザイスタイルで何とか夜を過ごす。

次の朝の外來で、拇指のまわりのギプスを切ってもらい、支払いを待っていると、昨夜のDrが引き継ぎを終えて通りかかり、

「やあ、少し拙けてもらいましたね」と笑った。

その時、不思議なことに私は「けがをして幸せだなあ」と思ったのである。

その後は岡山に転医したが、当時のレントゲンを眺めたDrは、

「ほーう、うまく整復したなあ」とつぶやき、私が、

「ギプスがちよつときつくなったので、切ってもらおうとー」と言ったら、じろつとにらまれた。

しかし私はあきらめず、要加療3ヶ月を短縮することに全力を注いだ。

ギプスを取った後の萎縮した筋肉のリハビリがかなりかかると聞いたので、そのリハビリ期間を限りなくゼロに近づけるよう、綿のしつかり入った太めのギプスに変えてもらい、一週過ぎから指を動かした。

二週間は肘までのギプスで指先の運動をし、三週からはギプスを短くしてもらうと、中指と薬指の間にボールペンをはさんで、字を書き始めた。

来るべき戦場にそなえて武器をみがくように、私は筋肉が痩せるのを防いだ。

多少骨は折れたようで、岡山のDrは、「せっかかきちんとなっていたものを」と仰言った。

ただし、折れたところの周囲にぴっしりとついたCaの沈着は凄いもので、

「ここを見てごらん、そう、ここ」と教えて頂いた時は感動した。

私は喘息があるので、痛みどめは飲まないし、皮膚が弱いので湿布は手首に出来なかった。左手の指先でのマッサージが、ギプスからシーネに変わった時の救いであった。

その間に渡米した娘夫婦が大至急セットしてくれたコンピューターの前に、生まれて初めて左手で向かった。

相手の手紙を読み、しるしばかりの返事を送る。大事業だった。

日常生活では色々困ったが、左手の爪は右足で切るといふ技を習得したし、茶碗は流水の下で、くるくる回せば片手洗いが出来ることも解った。

左手でそうめんや、そばもつまめるようになったが、ある日右手を使うようになったら、もう左手は使いものにならなくなっていた。

それにしても、皆様に御迷惑や御心配を大変おかけした一・五ヶ月は、過酷であったが、もしかすると私が医師として最後に見ることの出来た花火のようにも思うのである。

ただこの間に私はかけがえない恩師を、友達を、世話になったままの大切な人を失っていた。こうして、私のお休みは終わったのである。